

# 人麿歌集の作家研究

森 本 治 吉

は し が き

昨年末から今春にかけて私の関係した或る出版物の必要上「人麿歌集」を解説せねばならなくなつた。私の永年苦しんで来た問題なのでこれまで、よりより集めた材料をまとめて作家論・歌体論・地理論・信仰論と共に動物と植物の点からも検討を加へた。そしてその結果を若浜氏に話したら、偶然若浜氏も人麿歌集の植物に就いて「上代文学」に執筆するつもりで脱稿してゐるといふ話。その内容を聞くと結論は同一で、それを導く過程はより精密な調査の上に立つてゐる。それで大いに刺戟を得て、私も自分の人麿歌集研究を同誌上に発表したら学界の為便利であらうと考へた。私のは連載を必要とするが、その第一回として作家論を取り上げたのである。

(一)

人麿の自作と明記された作品は、数へ方で少異があらうが長歌十

六首。短歌六三首であらう。(これは「或は曰く」の歌も一応含めた数字である)人麿歌集の方は、長歌二首。旋頭歌三五首。短歌三三〇首である。

この両者の性質にどれだけの違ひがあるかといふことは、代代の万葉研究家を悩ました難問題である。私の考へるところではこの解決が全部解決し終るといふことは、今のところ不可能だし、将来も微小な部分に就いては不可能な点が長く残つてゆくかもしれない。だが、悲観的にだけ考へて不可能な歌集だと投げだすのは無意味である。それどころかやり方次第では現在の吾々の知識を以てしても十数個の要素を条件として随分はつきりした線まで開明できる。つまり十中八九まではこの両者が異なつた存在である。「人麿歌集の大部分が人麿の作である」とか「この歌集は人麿自身が編纂したものだ」とかいふ考へは白昼の夢にすぎない。事實は人麿作品と正確に認めねばならないものは用字法や用語の点等からわづか数首を挙げてうるに止まる。その反対に、必ず人麿作と見てはならないといふ

作品は百数十首の多数に上る。——以上のことを確実な根拠を挙げて指適出来るのである。

さういふ根拠を今後いろいろな機会に挙げて大方の御批判を得たいと願ふものだが、ここにはその一つとして、人麿歌集の中の作者を綿密に調査して、はつきり人麿と人麿以外の作者と見るべき人が、意外に多数であることを報告したいのである。

歌集の中の人麿以外の作者と見るべきものは、次のやうな論点に依るものである。

A 作者の明記されたもの

B 歌の内容客によるもの

- 1 女性の作者
- 2 農夫・獵夫の作者
- 3 イデオロギーに就いて

(二)

A 作者明記

この問題は、この歌集の歌は人麿作品だと漠然と考へてゐる人に、最も無慈悲に変更を迫る力を持つ。その作品は私の計算では十一首に上る。

泉河の辺にてはしびとのすくぬ間人宿禰の作れる歌二首

河の瀬の激つを見れば玉をかも散り乱したる川の常かも

9 一六八五

彦星の挿頭かざしの玉たまの嬌恋こゝろに乱れにけらしこの河の瀬に

9 一六八六

舎人星子の御歌一首

ぬばたまの夜霧は立ちぬ衣手を高屋の上に糊引くまでに

9 一七〇六

元仁の歌三首

馬並まなびめてうち群れ越え来今日見つる芳野の川をいつか反り見む

9 一七二〇

苦しくもく晚れぬる日かも吉野川清き河原を見れど飽かなくに

9 一七二二

吉野川河浪高み滝のうらを見ずかなりなむ恋こゝろしけまくに

9 一七二二

絹の歌一首

河蝦かま鳴く六田むろの河の川楊かわやなぎのねもころ見れど飽かぬ河かも

9 一七二三

鳥足の歌一首

見まくみ欲ほり来しくもしるく吉野川音ねの清きけさ見るにともしく

9 一七二四

麻呂の歌一首

古の賢さしき人の遊びけむ吉野の川原見れど飽かぬかも

### 3 人麿歌集の作家研究

ここに記された作者のうち、舎人皇子は履歴がはつきりしてゐる。天武天皇と新田部皇女との間の皇子。養老四年日本書紀を編纂し同七年薨去といふのであるから、人麿とはほぼ同時代である。万葉集中に自分の歌三百があり、人麿歌集の中にこの皇子に献つた歌二首（一七七四・一七七五）がある。ところがその他の作者は履歴がわからない。聞人宿禰は何人か不明である。聞人大浦（三卷二八九・二九〇の作者）ではないかといふ説があるが、この大浦も伝記不明である。その上大浦がこの聞人宿禰か否かに疑問があるのだから、結局不明と結論する外はない。その他の元仁・絹・島足・麻呂の四人に至つては全然手がかりさへない。「麻呂」は人麿と見る人があるかも知れないがこれは成立し難い。「麻呂」といふ名を持つた人は万葉に十人ある。「商長麻呂」「石上麻呂」「大藏麻呂」「春日部麻呂」「坂田部麻呂」「角麻呂」「藤原麻呂」「舟麻呂」及び目下の人麿歌集中の麻呂、並に次に説く一七八三の歌の中の麻呂である。だからこのうちのどれかの麻呂であつたかも知れないし、又全然別人の麻呂かも知れない。ましてこれを人麿と見ることは明白な誤断である。

次に問題となり得る二首がある。

妻に与ふる歌一首

雪こそは春日消ゆらめ心さへ消え失せたれや言も通はぬ

9 一七二五

妻の和ふる歌一首

松反しひにてあれやは三栗の中上り来ず麻呂と云ふ奴

9 一七八三

この場合、一七八二の歌の作者は、題詞や歌そのものからは、何といふ名の人か不明である。ところが一七八三の歌の第五句に「麻呂」といふ人名が見える。これはどう考へても一七八二の歌の作者名としなくては、この問答歌の作意に合はない。ところがこの「麻呂」は、人麿のことだと見る見方が起るかもしれない。しかし「麻呂」が決して「人麿」であり得ないことは、上に解説したとほりである。

この人名の点を別にしても、人麿とその妻の贈答歌と見得ない点が多くとも二ヶ条ある。第一は、これは夫婦の問答相關歌であるが、人麿明記作品では、人麿と彼の妻との贈答の歌といふものは、一首も無い。思ふに実際問題としては、互ひに取り交してその意志を通じてゐたかも知れない。それが何故相並んで万葉に載つてゐないか。そこに問題があると思ふ。といふのは、当然考へられることだが、人麿こそ古今に秀でた作家だが、その妻まで、女人作家中の一流の一流だつたといふことは絶対といつていい程あり得ぬことである。すると、これを選りすぐつた作家だけを並べてある巻一・二・三の如きに載せられる筈がないのである。私一人の推測を許し

てもらへるならば、人麿は極度に低い官位であつただけに、その妻は教養高くて秀歌を詠み出づるといふのとは、反対の女性であつたであらう。恐らく夫に並ぶ名女流と見るよりも、この方がはるかに可能性があらう。とにかく理由は別としても夫妻相並んだ明記作品は無いのだから、この歌集の間答歌だけをさうだと見なすことは穩かでない。

第二の理由として、句切のことが挙げられる。これは別に独立の項目として論ずるつもりだが、人麿の六十三首の短歌のうち、第二句で言い切つた二句切の歌は三首しかない。或本歌を認めて加へると四首になるが、六十三首中三、四首では話にならぬ少数である。これは二句切などと真反対の一句から五句までの句切無しの作風が量質共に人麿作品を一貫した特徴であつたことを物語つてゐる。事実「ささなみの滋賀の幸崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」「東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ」「埴安の池の堤の隠り沼の行くへを知らに舎人はまどふ」等の名歌と許されるものは皆、二句切など含まぬ氣息の長い短歌だけである。

これに反して、人麿歌集には、実に三八首（数へ方では三九首か四〇首）の二句切歌を見出す。一群の歌団でこれほど二句切を特色とする作品群は、万葉にまつたく発見できないのである。——これを考へると、ここに二句切問題歌が有るのは如何にも人麿歌集的風景だと微笑まれる。とりわけ一七八二は、第二句と第四句との二

ヶ所に句切がある。又、一七八三も、第四句を「中上ナカノボリコエ不來」と訓めば明らかかな二句四句切である。（ただし「ナカノボリコエ」と訓んで下の「麻呂」に懸かる連体形と考へることも可能であるが）

これを要するに、以上の十一首は、作者の名の記録されてゐることを論拠として、人麿以外の作者たることの証明できる作品である。

### (三)

#### B 1 女性の作者

人麿歌集に女の作家が入つてゐることは、一読して誰でも気づくほどいちじるしい特色である。そして、女性の作家があることは、この歌集に反人麿的な一要素を加へるわけである。それで、従来このことに言及した学者も無いではない。だが、それ等の論では、その女歌人は人麿の妻だ。この歌集は人麿自身の歌と共に彼の妻の歌を取り収めたのだ、といふ立場が取られてゐる。——この解釈が成り立つなら、女の歌が入つてゐても人麿歌集の根本性格に影響はない、といふことになる。

ところが私見では、これは調査が粗瀆な為に生れた誤解にすぎない。

正確に調べれば調ぶるほど、女人の歌は質・量両面にわたつて大きな意味を以て登場して来るのである。

先づ分量の点から取り上げてみる。

前に、作者明記の歌例を掲げた。あの場合は、氏名がはつきり記されてゐるので、何の抗議も出せぬほど結果が明瞭である。

それに比べるとこの場合は、内客が衣服の裁縫や衣を染める歌でどうしても男では有り得ない作品。「君」といふ語が歌の中に在り、内客全体が恋の意を盛つてある作品。——かういふ点から、この作者は女たなと判断を下すのである。

その判断の結果が女の作者と認められるものは、実に六四首の多数にのぼる。初にその国歌大観番号を掲示し、次にその実例の若干に解説を加へてみる。読者諸賢からこの判断の当否に就いて御教示を賜はらば幸甚である。

- 7 卷一〇九四・一二四九・一二七六・二二八〇・二二八一・一二八八・一二九一・一二九二・一二九七・一二九八・一三〇八・一三〇九・一七八三（上掲作者明記の歌と重出）一八九〇。
- 10 卷二二四〇。
- 11 卷二三五六・二三五七・二三六〇・二三六一・二三六八・二三六九・二三七八・二三八〇・二三八一・二三八二・二三八四・二三八九・二三九四・二三九八・二四〇五・二四〇七・二四〇八・二四〇九・二四二一・二四二三・二四二四・二四五四・二四五七・二四五九・二四六五・二四六六・二四七〇・二四七三・二四七六・二四七七・二四七八・二四八四・二四八八

- 五・二四九〇・二四九七・二四九八・二五〇〇・二五〇一・二五〇二・二五〇三・二五〇八・二五一一・二五二二・二五二三・二六三四

12 卷二八四一・三〇六三・三四七〇

この女人歌と私の判定したものの実例を挙げてその性質を説明してみる。次の第一首が都市の女。第三首が農村の妻。第五首が海辺の作者といふ風に、それぞれ色彩の異つてゐることによく御注意願ひたい。

うち日さす宮路を行くに吾が裳は破れぬ、玉の緒の念ひ萎えて家に在らましを

7 二二八〇

君がため手力疲れ織りたる衣ぞ、春さらばいかなる色に摺りてば好けむ

7 二二八一

この岡に草薺る小子然な薺りそね、在りつつも君が来まさむ御馬草にせむ

7 二二九一

くれなゐに衣染めまく欲しけども著てにははばか人の知るべき

7 二二九七

大船の候ふ水門事しあらば何方ゆ君が吾を率凌がむ

7 一三〇八

垂乳根の母が手放れ斯くばかり術なき事はいまだ為ななくに

11 二三六八

ぬばたまのこの夜な明けそ朱らひく朝行く君を待つは苦しも

あしひきの名におふ山菅おしふせて君し結ばば逢はざらめやも  
11二三八九

君来ずば形見にせむと我が二植人ゑし松の木君を待ち出でむ  
11二四七七

11二四八四

朝づく日向ふ黄楊櫛古りぬれど床のへ去らず夢に見えこそ  
11二五〇〇

まさ鏡手に取り持ちて朝なさな見れども君は飽くこともなし  
11二五〇二

この種の歌には共通して、やさしい女心が見える。二四七七の如きその点で特に注視される歌である。それに又素材としても、裳や織物や櫛や、女でなくてはとうてい思ひつかぬ歌材である。

とりわけ指摘しておきたいのは、かういふ女人だとはつきり明言される歌が、歌材も作者の社会的位置も種々異つて居り、そこに一貫した聯關が見られぬといふ事である。何よりも歌体が旋頭歌・短歌と相異してゐる。従来は、「人麿歌集には女の歌がある」と私などが主張すると、よく、それは人麿が自分の妻の歌を取り入れたのだとか、周囲の女の人の歌を採録したのだとか、反駁されたものである。——しかし、若しさうならば私のここに計出した六四首には一人の官吏（特に舎人）の妻としての一貫性がありさうなものである。それが見当たらないのだから、人麿の妻説は崩壊せざるを得な

い。第一、こんなに沢山の妻と、人麿一人とが都市や農村や山峯の狩場等で交つたとしたら、人麿は精力絶倫のホルモン所有者といふことになるが、反論者はそれでかまはないのか知ら？

(四)

2 農夫・獵夫の歌

ここにこの歌集の作者判断の一条件として、歌の内容から作者が農夫又は獵夫の生活を送つてゐた。草刈り柴刈りし、自身で衣料を作り、染めした人々だと思ふべき歌を挙げる。その歌例は次の如くで、第一首の如きは栽培農業以前の、自然採集経済生活が、優美に文学化されてゐる。

君がため浮沼の池の菱採むと我が染めし袖ぬれにたるかも  
7二二四九

かにかく人はいふとも織りつがむ我が織物の白麻衣  
7二二九八

打つ田には稗は数多にありといへど扱えし我ぞ夜ひとり宿る  
11二四七六

劍の後鞘に納野に葛引く吾妹、真袖もち著せてむとも夏草刈るも  
7二二七二

住吉の小田を刈らず子奴かも無き、奴あれど妹が御為と私田を刈る  
7二二七五

春日すら田に立ち疲る君は哀しも、若草の妻無き君が田に立ち  
疲る

7 一二八五

この岡に草刈る小子然な刈りそね、在りつつも君が来まさむ御  
馬草にせむ

7 一二九一

これらの歌例が農的な色彩を発揮すればするほど、作者は農村の庶民の一人として生活してゐたことがはつきりする。——もしさうでないならば、これらは農村に於て広く行はれてゐた民謡であつて、この民謡によつて歌ふ人の氣持が共通に代表された作例であらう。

次に獵夫の生活のうかがはれる歌例もある。皇族や貴族が狩をするといふ歌は集中に相当あるが、庶民の狩に関する歌は極めて少いのである。

江林に宿る猪鹿やも求むるによき、白たへの袖巻き上げて猪鹿  
待つ吾が背

7 一二九二

高山の峯行く完の友を多み袖振らず来つ忘ると思ふな

11 二四九三

これは獵夫又はその家族の歌と見るが妥当であらう。第一首は旋頭歌で、獵夫の妻が我が夫のことを歌つたもの。内容も、袖をたくり上げて猪や鹿を待ちかまへるといふので野性満々である。

第二首については、上句に「峯行く完」といふ言葉の出でゐるのは、興味深い。「完」は動物を表はしてゐるのだが、その実物に就

いて東光治氏は、「続万葉動物考」の中で、一般の鹿・猪の類は、高い山の峯の上などを歩くものではない。ところが、カモシカだけは、群をなして高山の山陵を通行する。だからこれはカモシカを歌つたものだといてをられる。この説に従ふと作者は作品の比喩にカモシカを使ふことによつて自分自身の住む生活圏が高山獵師の世界であつたことを示してゐる。特殊な生活環境だから、普通の農民といへどもかういふ知識を蓄へて比喩に使ふなどいふことはあり得ぬことがらである。

尚このほかに次の一首は、鷹獵を歌つたものだが、この作者をどう考ふべきかが問題になる。

垣越ゆる犬呼び越して鳥獵する君、青山と繁き山辺に馬休め君

7 一二八九

私はこれは、あづま歌の中の「都武賀野に鈴が音聞こゆ上志太の殿の仲し鳥獵すらしも(14三三四三八)」と同性質と考へてゐる。両首とも村人が自分たちより良い身分の人の鷹獵を敬意をまじへて歌つたものと解釈したい。

以上、農・獵関係の歌として掲げ説明した歌の作者は皆その氏名を逸してゐる。だが、彼等の生活が自分で食料や衣服をかせいだ民間人であつたこと。更に、その暮し方が、藤原京や奈良京といふ大都會での都市人でなかつたことを、実にはつきりと吾々に物語つてゐるではないか。

さて、それが個人作品か民謡であつたかは別問題として非都會の民間人であつた、といふ私の判断が若し誤でないならば、次の段階として、これらの歌は人麿自身の作品では決してなかつた。人麿歌集のうち、女性の作品と共に、これ等の歌を反人麿性のはつきり刻みつけられたものとして挙げる事が出来る。いふまでもなく、人麿自作と明記された歌の内容客や作歌動機から判断して、人麿は官吏として仕へ、そのため生活の経済的基礎は上から貰ふ俸給によつて支へられてゐたと考へられる。この見方は方に一つも誤はあるまい。さうすると、さういふ役務を持ち、吉野その他の行幸に従つて歌を奉る生活と、稲田に下りて米を作り、草や柴を刈り取り、又山野の獣を追ひ廻すといふ民間人的生活が、一身で同時に行はれるとは何としても考へ難い。

ここに作者の氏名が無いかかはらず、これらの歌を詠んだ人が人麿でなかつたといふ判断を下さざるを得なくなる。

以上を総合すると、人麿歌集の作品中、実に多数の反人麿と明確に指示出来るものを、吾々は計数によつて示すことに成功したやうである。試みに実数を掲げると、人麿作ならざる歌は、

作者明記の歌九首。

女性の歌六四首。

農民、獵夫の歌約十三首。

#### 合計八六首。

といふことになる。この外に、作中の地名や、人麿が全然取り扱はなかつた、外国渡來の仏教や神仙思想、又、七夕を詠んだ歌の如きが数十首あつて、これらがこの八六首の上に加算されるのであるから、今後研究を進めるにつれて、人麿歌集の中に人麿作品の正確なものを探すといふ吾々の作業は、いよいよ効果を増して、これまで夢想もされなかつた結論が引き出されると信じてゐる。

#### (五)

#### 3 イデオロギーに就いて

以上のほかの条件——地名・外国關係事項の如きは、他日稿を改めて説くこととして、ここに右掲の諸歌の作者たちの思想性に就いて、一言しておきたい。これは「作家論」の一角として、逸してならぬ要素だからである。

作者達の実生活は、既に掲げた歌そのもの、又はその解説の拙文によつて、相当明らかになつたと言へるであらう。この作者たちの思想の座標も、それから類推して略々明瞭である。そこでこれを人麿と対比することによつて、性質が更に鮮明に浮び上ると期待される。

憶良や赤人・大伴家一族等を含んで万葉著名作家の大部分は官吏であつた。これは書紀・続日本紀・公卿補任等にその名や官職が見



えることによつて直接に知り得るし、又その作品から想像して推知することも可能である。だが、それらの中で、凡そ人麿ほど官吏としての性質を色濃く表はしてゐる作家は無い。ことに著しい特色は、彼が官吏一般の性質をとり越えて、天皇個人又は皇族個人への忠誠的態度を明白に露呈してゐる点にある。それは中世封建社会の武士道の忠義が突然古代に現れたかと疑はれるほどである。

一方、人麿歌集は、大部分が人麿作品だ、だから人麿の名が冠せられたのだ、といふ見方が今日でも無いではないし、江戸や明治の研究界では、なほ更さうであつた。然るに歌集に現れた作品にはさういう皇室忠誠を主題目とした作品は見当らない。一般論は後日に譲るとして、以上に掲げた、はつきり人麿以外の作者と見得る人の歌には、毫末もさういふ色彩がない。つまり、この作者達の生活や、考へ方や抱く希望は悉く彼等自身の為である。彼等の恋人や家族が中心である。ここに人麿自身のイデオロギーと実にはつきりした対立を発見する。人麿自身は、官吏や人民は猪や鹿のやうに、地びたを這ひ廻つて皇族に仕へる生活を実践した。さういふ生活に無上の喜びを覚え、これを光榮として喜んだ。その余りに吉野の山や川まで天皇に仕へるといふ考へ方を歌の中に押出して来る。これと歌集の作者達との間には真に越ゆべからざる絶壁の横はつてゐることを、認知しなくてはならない。それが他の方面の調査と相まつてこの歌集の真の認識を昭和の学界にもたらす近道である。

沢瀉久孝著

萬葉集注釈

巻第一 A5判上製・中央公論社刊・辛八〇〇  
巻第二 A5判上製・中央公論社刊・辛九五〇

生涯をかけた万葉訓詁研究の成果。先行学説に対する客観的な批判から導かれた堅実な解釈は、万人必読の業績に満ちている。

西角井正慶編

年中行事辞典

B6判上製・東京堂刊・辛九五〇

旧来の公事、武家の故実的行事及び町方田舎の風俗習慣について、文献考証及び民俗学的考察をなした。特に祭事の部分に詳しい。

青木生子著

日本抒情詩論

A5判上製・弘文堂刊・辛六〇〇

大久保 正著

萬葉の伝説

A5判上製・塙書房刊・辛七七〇